

商 品 學

石 井 頼 三

35

一橋に於ける商品學は最も早くから授業されたものである。初期の商法講習所時代にはこの名を見ないが中期すなわち明治十四年の規程には商品誌という名のもとにこれが課せられている。以來幾たびか學則が改變されたけれども、商品學は常に重要な學科として課程の一角を占有して今日に至っている。一橋の歴史と共に生き抜いているとも言える。學科としてはこの様に古いものであるが、これが教授陣の方を回顧するに、その間には殆んど師第の關係なく他の大學の卒業生がつぎつぎに一橋に來てこれを繼承している。もっともこれは或は一橋だけのことではなく、商品學そのものの性格によって、その様な形をとった迄の事で、他の大學に於ても屢々、同様な事は見られる。而も一橋に於ては、商品學を擔當した

教師は問題なくはじめ、まず理工學を專攻した人であるということ、少くともここ七十年來そうであったことは明らかに一つの特色と言える。師弟關係のない人々が、つぎつぎに入つて擔當する商品學が、學派的なものを生ずるかどうかという疑念は一應あるが、少くとも東京商業學校時代の商品學に對する學的態度が今日に於ても一部持續されている事を見ると、むろん學派的なものではないが、一橋の商品學が大體一つの方向を指して來たことは確である。これは擔當者が理工科學の者であつたこと、後繼者は前任者と數年間同僚として共に過すように仕組まれて來たこと、等にもよるが一つには一橋商品學というものが大體できて來て、一橋學園の大きい抱擁力と共に、人をこの中に引き入れるものによると考える。

商 品 學

明治五年學制頒布、六年更に學制が追加されて専門學校の規定が設けられ、その中に商業學校を認め、その本科に於ては一、記簿法、二、算計法、三、商用物品辨識（其原由、其使用、其性質、其種類、其價值、其眞偽、其試法）、四商業學、五商法を講述することが制定された。この制度はむろん當時の歐洲のものに倣ったものであるが、わが國の實情はまだこの企劃を實現するまでに到達してはず、遂にこれは企劃のみに終っている。ここに言う商用物品辨識とは今日の商品學の事であり、商業科五科目の内の一つとして採り上げている處を見ても、明治初年の商業教育に於て已に商品學を重要視していたことが窺われる。

明治八年本學の源である商法講習所は米人を中心とする洋式商業教育機關であるが、その教科内容を見るに帳合法、經濟書、商法律書、商用藝術書を講述し、英習字を習得させることとなっており、別に商品學に該當する學科の設定を見ない。商品學は歐洲殊にドイツを中心とする處に發展した學であり、今日に於ても米國では特に商品學を形成してない有様であり、講習所が米式をも

つて始められ、當初商品學が缺除されているのも不思議ではない。

しかしこの學科課程は開所初期の事であり後には科目の變更が行われているが、明治十二年の講習所講義要目には商品學に當るものを見ない。十四年には規則を改正し、物産誌なる科目を擧げてこれを天然物産誌、人造物産誌兩面に互って講じ、更に物産を國內の部と外國の部とに期を分ちて教授している。この物産誌が今日でいう商品學であり、本學は少くとも明治十四年に已に商品學を講述している。同時代に製産法というが規定されているが、これはむしろ應用化學と見るべきものである。

商品學關係の教科書としてはブラウン氏物産誌、ニーツ氏産物沿革誌が明示されている。これらの書物の内容及び講師名はこれを詳にすることができない。しかし後になつて明治十八年教科書として日本商品誌、ブラウン氏製品誌、文部省から出版されたイーツ氏の商業博物誌（瓜生氏譯）がある。

イーツ氏商業博物誌 (Ihon Yeats: Natural History of the Raw Materials of Commerce) の原典第一次刊

行は明治三年（一八七〇）の事であり、博く商用の物産を論述した書物である。その取材する處地球上所産の廣汎に互る。これは全世界を以て一大倉庫と見做し、その中に蓄藏する諸物に通曉し、商業に従事するに當りて、物品の處理を正常圓滑にせんが目的である。本書はこれを二門に分ち、第一門は英國と近隣歐洲諸國英領植民地の地理及び外國貿易の關係を論じたもので、英國を中心として地理學、地質學見地から生粗品を論じたものである。英國鑛產物、動產物、植產物、歐洲諸國の特有製品論、亞細亞生粗品論、若干の人為的變化物產を取扱っている。第二門に於ては植物界商品論と題して食用植物、醫藥用食物、工業用植物よりの各製品、第三門には動物界商品論として動物所産有用物、第四門には鑛產品をあけている。これらの商業博物誌を通覽するに、分類の基底をなすものは博物分類であり、これに地質學的のものを配し商業取引に關係あるものを特に詳細に説明するという態度である。

明治十八年九月には東京外國語學校に所屬していた高等商業學校を併せて、文部省直轄の東京商業學校となつ

商 品 學

たが、翌十九年五月商品の擔當者として理學士石川巖氏がその教諭になつてゐる。講習所時代は不明であるが、文部省直轄となつてから最初の商品擔當者である。石川氏は翌二十年高等商業學校となつてもこれを擔當し、引き続き明治三十五年に及んでゐる。その在任期間は必しも長いとは言えないが、それが初期の時代であつただけに、一橋商品學の形成には大きい影響を與えたと言わねばならぬ。

石川氏の授業の内容はその著「重要商品誌」（同文館藏版明治三十年出版）について見ることが出来る。石川氏は明治三十七年現職のまま他界されているから、この著書は氏の晩年の作であるが、恐らく高等商業學校初期に於ける講義を纏めて刊行されたものと見ることが出来る。むろん市販を目的とせるため、講義内容よりは若干程度を下けたものであることは、巻頭にも明示してゐるところである。今その「重要商品學」の内容を通覽するに、第一章農産、林産製品、第二章水産製品、第三章工業製品、第四章鑛業製品と分けられている。この分類方法は今日の食料品、衣料品、燃料等に分つ方法からすれば、

粗雑に失する観があるが、取扱っている個別品目に就いては特に逸脱しているわけではない。例えば農産並林産副生物中に米・茶・砂糖・藍・棉花・繭・羊毛並獸毛・大麻亞麻其他麻類・蠟・樟腦並樟腦油、水産物としては鰯・昆布・煎海鼠・乾鮑・寒天・鱧鱈・乾蝦等・魚油、工業製品としては陶器・七寶・硝子・漆器・綿絲・綿布・毛絲・毛布類・蠶絲・絹布類並毛布・燐寸・地席・麥稈眞田、鑛産製品としては鐵・銅・アンチモニー・亞鉛・鉛・錫・マンガン鑛・銀・黄金、硫黃・石炭・石油を擧げている。

これらの項目を通覽して感ずることは、その商品が著しく日本的なものが多いということである。講習所時代の教科書であるイーツ氏の商業博物誌に擧げる處と比較するに格段の相違である。これは石川氏によって翻譯商品學からわが國に適合した商品學が立てられたものであり、石川氏の功績といふことができる。これらの商品の項目を見るに如何にもわが明治初期のわが經濟界を反映している。すなわち米・砂糖と並びて藍を擧げ、樟腦をあげ、工業製品の第一に陶器次に七寶更に漆器或は麥稈

眞田を取り上げている如き、今日から見ると一向に主要でない商品が主要商品の中に列しているのである。これは工業製品の少い當時としては主要なものであったものである。殊に米の項を見るにわが日本米が輸出米としての資格が論ぜられていたのも正に隔世の感がある。日本米はその年の豊凶によって輸出の可能なる額に著しい差異があるから、一つの安定な商品と見ることはできなると斷定しているのも農業國日本の姿の一面を見せている。

石川氏は明治十九年から同三十五年に亙り滿十六年間に一橋で商品學を講じたが、この時代に一橋の商品學は方向づけられ、その傾向は今尙學園中に存続しているといふことができる。由來一橋に商品學を講述する人は盡くその基盤を理學におき、前もって理工學を専攻している。むしろ商品學の後繼者の人選に當ってその様なことが明文化されてはいないが、これは不文律に行われたところであり、傳統の一つとも言える。

石川氏の商品學は理學的色彩の強いものである。商品學がヨハン・ベックマンによって技術的な部門と敘述的

な商業學的部門に截別され、この技術的な部門を工藝學と稱して一應商品學から離し、商學としての商品學はこの技術的部門のなきものとされた。しかしこの技術的分野を抜いたものは支柱なき建築物であるとし、ベックマン以前の形を繼ぐものもあって、商品學にここで二派を生じることとなった。石川氏のとられた商品學に對する態度は技術面を支柱として入れたベックマン以前のものである。恐らくは獨乙から取り入れた商品學が理工學的色彩の強いものであったのに起因するが、一橋が理學士石川氏を選んだということが已に一橋の商品學に對する態度が決められたことといえよう。そこを石川氏が更に進展させて一橋商品學の方向をつけたものと考えられる。

石川氏の商品の取扱いは個別商品について産出並貿易の狀況を説述し、次に原料並に製造、性質並用途、種類並品位、荷造等の項目を設けて説明している。この形式はむしろ石川氏の創案によるものとは言えず、古くから用いられた商品誌等に於いても見られるところである。石川氏の商品學は全體としては理化的色彩が表われ

ているが、商學的分野の取扱ひ方も適度に取り入れてある。貿易、品位、種類、荷造り等の項がこれに當り、分量から言つて多いといふことはできないが、原料、製造、性質と言つた方面と均衡がとれていて、特に生産方面のみを強調しているといふ様なことはない。石川氏の商品學の取扱ひ方を「重要商品學」から類推すれば、理工學を支柱とし、これに適度の商學的取扱ひを加え、而もこの二者がよく調和していたものといえる。むしろ商學的雰圍氣の中で理工學を調和せしめた結果産れたとも言える。獨乙流の理工學を強く出したものよりも、恐らく商品學はその様な形で日本に入つたのであろうが、それよりも更に商學的な商品學となつてゐる。

商品學という名稱であるが、東京商業學校の頃から單に「商品」と呼んで商品學とは呼んでいない。明治三十二年から商品學と改稱している。(この呼び方は大正四年まで續き大正五年から再び「商品」と呼び、新制大學の發足の昭和二十四年から商品學と呼ぶようになった。)これは從來商品誌的の取扱ひ方で、學とはなつていないと言ふ考え方から、水準を揚げて學として取扱う

ようになったとも言える。この商品の昇格にも石川氏の功績は與つて力大であつたと思う。

石川氏の講義は明治三十五年七月に及んでいる。石川氏に次いで商品學を講じたのは猪原吉次郎教授である。應用化學專攻の工學士である。猪原氏は石川氏が三十七年休職となるまでの二カ年間に一橋の教壇に立つて商品學を講じている。猪原氏の著書或はノートのプリントの如きものが手許になく、従つてその教授内容は不明であるが、恐らく石川氏の商品學をそのまま繼承されたものと思われる。それは石川氏が商品學の授業は擔當されなかつたが(多分病氣のゆえ)現職であり、且つ猪原氏の期間は極めて短かつたからである。

明治三十七年九月から三十八年八月迄の一カ年は商品學が休講となつてゐる年である。次いで明治三十八年猪原氏に續いて奈佐忠行教授が商品學を擔當されることになった。氏は地質學專攻の理學士で商品學の外に商業地理を擔當されたのであるが、これから以降大學に昇格するまで商品學を講ぜられ、大學昇格後は木村惠吉郎教授と共に退官の昭和二年まで商品學を擔當した。奈佐氏は商

品を擔當した年數も三十四年に及び、これだけ長く續いて商品學を擔當せるは今迄の處奈佐氏を措いて他にないのである。それだけに氏は一橋の商品學には大きい影響を與へたと見える。

石川氏猪原氏は共に化學專攻の士であり、一橋草創時代における商品學の方向をきめたことは前述の通りである。奈佐氏は地理學を專攻し、講ずる處は商品學の外に商業地理である。地理學殊に商業地理學は理學系というよりもむしろ文科系に近い學であり、その講ずる處の商品學も石川、猪原兩氏によつて樹立されたものをそのまま繼承するという風ではなかつた。従つてここで一橋の商品學としては一つの變化を來たした。奈佐氏は著書を殘さず、僅かにその講義ノートによつて氏の商品學のあり方を見るのみである。その取上げてゐる商品の種類にも前任石川氏の夫と比較して見ても明らかに差別が認められ、理化學的色彩は強く出ていない。むしろ地産品というか農産品というか植物性商品並びに動物性商品の講述を主體としてゐるものである。一橋大學の商品學は極めて古くから置かれてゐる學科であるが、この初頭に記

述せし如く學科擔當者間に必しも師弟關係はなく、むしろないのが本體の如くであり、擔當者の更新によって、その取扱方が變化するものである。しかし七十年の商品學の歴史を通じてこの時が最も大きいのではないかと思われる。すなわち理化學的色彩のものから農學的地理學的色彩の強い商品學に轉移したのである。しかしこれは石川氏の商品學と奈佐氏の商品學とを比較したからこの様に考えられるのであるが、一橋全體として見るときはさ程の變化ではなかった。それは奈佐氏が商品學を擔當したと同じ年に應用化學專攻の工學士木村惠吉郎氏が教授として著任し、應用化學を擔當している。これは石川氏の擔當していた應用化學、商品學を二分して一つは地理學の奈佐氏が擔當し、他の應用化學を木村氏が擔當したものであり、大きく見ると石川氏の商品學に對する態度が大きくは繼承されているからである。すなわち商品學のうち、理化學的色彩の濃厚な部分は木村氏が應用化學の名稱の下に、これを受け継いだとも見られる。従って實際上には一橋としての教育効果には大した變化はないという見方である。しかしながら商品學單獨について觀

ずるときは、このため一つの轉換を見ることになったのである。これは明治三十八年のことであるが、これから大正九年大學昇格に到るまで一橋商品學は、表面は奈佐氏の獨り舞臺となった。

奈佐氏の講義は木村氏の應用化學と相組んで一體をなすが如く意識的に配案された關係かその講義の内容は著しく偏っており、今その講義ノートに就て見るに、その緒論を講述したるのちは植物性商品、動物性商品、を挙げているのみである。むろん年によって内容が異なっているであろうが、或る年の例にそれを見るのである。而して植物性商品としては米・麥・豆・砂糖・果實・茶・コーヒー・アルカロイド・香味料・木材・纖維類、動物性物質としては脂肪・皮革・肉類・魚類・鳥類をあげている。

氏は商品學とは商品について種々研究する學であるとし、その基になる商品そのものについてはあまり嚴密な定義は下さず、ただ商店にて取扱うものという位の意味に解している様である。その商品について何を考察すべきかに就いては、(一)物理及び化學的外見、(二)源泉、(三)組

成、(四)性質、(五)用途、(六)製法、(七)商品の種類分け、(八)荷造りの方法の研究等をあげている。この物理的化學的に調査するという意味は、例えば顯微鏡を用いて纖維を調べる如きである。又化學分析を一々物に就いて行うことはできないが、單に化學上の性質を調べてその物を確認し又良否を判定する如きである。大體は物理的性質によつて商品を決定するのが便宜的であるが、それだけでは足らぬから化學的方法も用いるのである。(二)の源泉とは商品がどこで出來たかを調べることである。その商品の産地を明らかにすることが商品研究には大切であるという意味である。(三)の組成とは或る商品が如何なる成分から成立しているかということ、(四)の組成によつて決められる。鑛石等にあつてはその中の成分によつてその價格に差異を生ずるからである。(四)の性質とは丈夫さ、保存に適するかどうかということ等をきめることである。(五)については説明の要はなく、(六)は製造とは單なる製法の研究のみではなく、製法が簡單であるか複雑であるかによつて、商品の品質にどういふ影響を與えているかをも研究するのである。(七)の商品分類とは商品にその産地の名

稱又は輸出入港の名前を冠して商品の種類分けをする如きことである。(八)の包装は商品の本質とは別であるけれども、商品が運搬されるときには必ず起きる問題である。商品を保護し、しかも必要以上にその容積を増し、或はその重量を増加するが如きは避けなければならぬ。これらの問題を取扱ふといふのである。

奈佐氏の商品學の取扱ひ方としては、單に商品の生産方法を強調するといふのではなく、すべてを商品の特性すなわち運搬性・保存性・代替性と言つた性質に強く關連せしめつつ、又貿易という立場に立ちつつ、商品を見てゆくという態度である。今例を米にとつてその取扱ひ方を見るに、まずわが國の米穀事情を論じ、中國の禁穀令及び中國よりの輸入ルートに就いての所見を述べ、東南亞細亞地域に於ける米產特殊事情に論及し、更に歐米の米穀生産にも及んでゐる。この様な取扱ひは米穀政策とも緊密な關係にあるもので、商業地理の色彩の強い取扱ひ方である。むろん米の性質並に品質等については一般に行われているとおりに講述されている。米の貯藏についてはかなり微細に互つてこれを説き、常平倉にも論

及するという態度である。殊に外國米は貿易的の見地から取扱い、その包装單位、包裝狀況、輸入税、相場の標準、取引慣習、CIF、FOB、取扱商社名、出廻期、品質検査の方法、倉敷料等に至るまで講義して餘すところがない。すなわち米が内地米、外米につきその性質、品質検査の方法等の外、これが商品としての荷動き、その荷動きについて必要なる取引慣習をも講述するという態度である。

奈佐氏は明治三十八年から大正年間を通して一橋に於て最も長期に亘って商品學を擔當した方であり、その間一貫した教育方針の下に説いて倦まず、一橋の商品學に一つの傾向を與えた。石川、猪原氏によるものは、屢々述べし如く理工系のものであり、若しこれに繼ぐに化學專攻のものをもってしたならば、或は一橋の商品學は畸形的なものになっていたかも知れない。奈佐氏は理學出身の方ではあったが、必しも理學に偏せず、商品學を正常な形に持って行った、この功績は大きく評價しなければならぬ。奈佐商品學は大正九年昇格を期として、奈佐商品學と木村商品學に分れ、奈佐氏の後は昭和年代と

商 品 學

なって現佐藤弘教授によって受け繼げられたが、ここでわれわれは應用化學專攻の木村惠吉郎氏について述べなければならぬ。

木村惠吉郎教授は明治三十八年以來應用化學を擔當し、大正九年大學昇格と共に、商品の講座を擔當した。ここで商品學は商品という名の下に木村氏と奈佐氏の二名によりて講義されることになった。商品學を商品と呼ぶようになったのは大正五年からのことで、昇格を機としたのではない。大正の初め頃から商品學が學としての存在を論ぜられ、商品という一橋初期の名稱に復したのではないかと思われる。しかし量的にはここで商品學の並行講義という、他の大學に例の少いことが行われた。これで本學が如何に商品學に力をおいたかということが分る。これ以後一橋に於いては商品學は二本建となり一つは化學的色彩の濃い商品學（後年或る期間特にこれを化學商品と呼んだ）と、一つは地理學的的色彩の強い商品學とが並び講ぜられる習慣となって今日に及んでいる。

木村氏は大正九年大學昇格の年から、昭和十一年度まで教授として、後二カ年講師として前後十八年に亘って

商品學を擔當し、一橋商品教育には強き影響を與えた。氏は商品學擔當前十六年に互り高等商業時代の應用化學の擔當者であり、従つて商品學の氏のノートを見るに極めて理化學的なるものである。木村氏商品學の授業は氏自ら謄寫原稿を切り、これを教室内で印刷に附したプリントを毎時間毎に配布し主としてこれに就いて説明するという風であり、そのプリントの教室内に現に保存せられてゐるものを見るに肥料・石炭・高温タール・染料・油脂・重要鑛石並にその製品等重要なる工業所産商品を取り上げて、これらにつき可成微細に互る記載を見ることができぬ。これは口述筆記の方法では到底觸れることができないこと迄極めて詳細に記載されている。プリントの効果は十分認めるのであるが、毎年更新してこの大量のプリントを準備する教育的熱意には敬服する外はない。

木村氏の商品學は應用化學を基礎としてゐる。従つて商品學の學習に當つても、應用化學の知識を收得してゐることを要求してゐる。氏の商品學では應用化學製品の記述的な面が最も大部分を占めてはゐるが、なお商品に

關する他の事項例えば關連法規、商品の分類、品位決定に際して試料採取方法、品位決定の方法としての分析、貯藏中における商品の品質變化等のことも適度に配して、むろん單なる應用化學の講義ではない。今その講義の一端を窺う意味で木村氏商品學プリント中重要商品である肥料について見るに、肥料の取扱の第一に關係法規を要約してあげ、法の精神を説き従つて商品を取扱う場合その態度の決定に役立たさせるようにしてゐる。次いで詳細なる肥料の分類を示し、第一にカリ肥料、第二に磷酸肥料、第三に窒素肥料を取扱い、カリ肥料において實用カリ鑛石の名を列擧し、その性狀を明示し、鑛石からカリ肥料の抽出の方法を概説し、世界的カリ源を説述する。カリ肥料即ちカリ鹽の講述であり、カリ肥料購入についての徑路、包装、包裝單位、取引慣習、取扱商社等については必しも觸れない。この點は奈佐商品と異なるところである。磷酸肥料についても同様なことが言える。その論ずる處は鑛石の生産狀況、分類、採鑛、選鑛、燐分の檢定、過磷酸石灰の製法、檢定法、重過磷酸石灰、沈降磷酸石灰、トーマス燐肥、骨粉等、窒素肥料に就いて

ては智利硝石、硫酸、石灰窒素、硝安、尿素をとりあげ
産出状況、生産方法、性質、品質、生産高、輸入額を列
挙している。

この様に講義の極めて一小部分である肥料のみについで
も四〇〇字詰五一七枚に相當する印刷物が配布されて
いる。商品全般に互るときは恐らく幾千枚に當ると思わ
れる（全部のプリントが残存してないのであるが）。
この大量のものを木村氏自ら毎年更新してプリントにし
た氏の努力には傾倒せざるを得ない。商品學の教師とし
て最も功績が大であったと學内で一部に評せられるのも
宜なるかなである。商品としての肥料の講義もこれを應
用化學としての肥料の講義としてもこれ以上詳説するこ
とは不必要と思われる程、克明詳細な記述である。木村
氏が高等商業時代長く應用化學を擔當し、後商品學を擔
當したのであるが、その二者のプリントを比較するに、
講義の内容に精粗、量の多少の差はあるけれども、取扱
う根本的の態度には大差を認めることはできない。それ
程氏の商品學は應用化學に徹したものである。商學徒に
應用化學の知識を與える面において隨一の稱があり、こ

の時代わが國の商品學の性格にも影響を及ぼした。

奈佐教授は昭和二年退官、四年に現佐藤教授がこれに
代つて商品學を擔當し、爾來今日に及んでゐる。奈佐氏は
食料品、纖維品等を講ぜられたるに對し、佐藤氏は殊に
纖維品を重要視し、講義にて取り上げる品目は纖維品に
限られてゐる。氏の商品學は專攻の經濟地理學を背景と
し、立地論的の取扱いが強く出ている商品學である。そ
の他については、むしろ自然科学色彩を帯びた商品學で
あると言える。氏は長年に互りて商品學を擔當し、その
社會的地位、中の廣い人柄等によつて、商品學の學内にお
ける地位を確立せしめ、更に一橋の商品學を日本にお
ける商品學界の主導的立場におく基をつくつた。これは
一つには一橋大學の傳統を示すものであり、同時に佐藤
氏の一橋商品學への功績を反映するものと思われる。

木村教授は昭和十一年退官、十四年には河合諄太郎教
授が木村氏の後繼者として商品學の講義を擔當した。ここ
で特筆すべきは大學の講義の名稱は奈佐氏、木村氏共に
「商品」であつたが、河合氏擔當のものを「化學商品」と
稱し、佐藤氏擔當の商品と區別したことである。むしろ

ん奈佐、木村兩氏の時代にも前述の如くその内容に差異はあったが、ここでこれを明瞭にしてその分野を明確に規定した物と思う。河合氏は高商時代の一橋の卒業生で、奈佐氏の商品學を聴講し、復歸して母校の教壇に立ったので、ここで初めて教授者の中に師弟關係を生じたのである。これは一橋商品教授陣に今迄見なかった新しい關係である。併し實情師弟相次ぐと言う状態にはなっていない。河合氏はMITにおいて化學を専攻し、一橋における講義は木村氏の如く應用化學を主にした商品學であつた。氏は昭和十七年に南方に派遣され、歸朝するや、退官したので、大學の講壇に立ったのは數年にすぎない。しかしこの短い間、商品學に關する著書も多く、又日本商品學會の前身である商品教育協議會を主宰し、殊に中等教育の商品科の指導には盡瘁するところ大であり、この方面で氏の商品學が透徹することとなつた。

河合氏の化學商品は氏が南方勤務となつてから休講であり、歸朝退官後も休講がつづき漸く昭和二十二年から石井がこれを後繼して講義することになった。石井の講

義はことごとく河合氏のとれる態度を受けつぎ、著しい變化は認められない。更にこれを言うならば木村氏の商品學のゆき方を繼承しているということもできる。ここでは一橋商品學の内化學商品の部分には已に定つた一定の型ができたとも言える。商品の實體の認識という點に重きをおき、品質検査という意味で、商品學履習の學生に實習を課するという取り扱い方もその一つの表われであらう。

大正十二年の震災は一橋の校舎を全滅に瀕せしめ、わが商品陳列所も災を免れることは出来なかつた。それ以來陳列所の復活は見えていない。商品陳列所は高商時代早くから完備され、實物について教授するという初期の教育精神の目的を果して來たのであるが、時代の推移と共に陳列所に對する考えが變つてきた。すなわち時代に順應して諸商品を蒐集することは實は容易ならざること、その多くは陳列する商品の物置場と化する。これが震災を機とし失つた陳列所の復元しない最大の理由である。この陳列所に代り商品の原材料的のものを集めて、機動的に授業に使用する方針がとられた。商品教室の一

隅にある商品陳列室とは實は商品に關連した原材料の蒐集室の意である。これと共に完全に近いまでの化學實驗室がつくられた。これは商品を化學的に検査することを實習させる室である。商系大學にしてこの如き實驗室を有するということは一橋大學の商品學の一つの特色といふことができる。この現在の商品學教室を企劃したのは木村教授であるが、これを承認したのは一橋大學であり、全學が商品學に對する理解の度を示したものである。

昭和二十四年新制大學が發足した際、從來の商品及び化學商品は共に商品學と改稱された。これは大正五年商品學を商品と改稱して以來のことである。そしてこれを商學部貿易市場部門に配置され、講座の配當は受けなままま經濟地理擔當の佐藤氏、化學擔當の石井が兼擔の形でこれが講義に當った。商品の名稱が商品學に改稱されたのは新制大學の學科名に依つたもので、商品學の内容を檢討しての事ではなかった。新制の際に商品學に講座配當のなかつたことは、むしろ商品學に對する批判のあらわれと見ることができないだろうか。しかし二十九年

になって商品學の講座が認められ、石井が商品學第一としてこれを擔當することになった。この講座の設置如何は一橋商品學の重要な岐路に立っていたと言える。この講座設置だけは、現在における商品學の批判或は商品學擔當者の批判などという問題を超越した一橋の傳統の力であると言ひ得る。講座制による商品學の設置は官立大學中一橋大學が唯一のものである。それだけに商品學に對して一橋大學のもつ使命は重大であると言わねばならぬ。

石川氏に發した自然科学的なる商品學は、事實上奈佐氏商品學と木村氏應用化學、のちに夫々の商品學となり、木村氏の商品學は河合氏の化學商品を経て石井の商品學第一となつてゐる。この系列は屢々述べた様に理化學的色彩の強いのが特色である。その取扱ひ方は一つの傳統が形成されてゐる。

商品學が商系大學に課せられる以上、商學系學科であることの特質がなければならない。商品學を介して應用化學の知識を教授することが商學徒に必要であるとしても、それは商品學の第一義には當らない。ここに商學の

一橋論叢 第三十四卷 第四號

一分野に取り入れられたという根本的問題を認識して、その方面をも昂揚することが今後必要である。化學商品に續いた商品學第一に就いて殊に必要であると自省する。そしていつかは一橋出身者が一橋の商品學を繼承し商品學についても一橋學派が形成されるようにならなければならぬ。(昭和三十年七月廿九日)

参考文献

高等商業學校(東京高等商業學校、東京商科大学)一覽

石川 嶺著 重要商品學
 文部省藏版 商業博物誌(上卷及下卷)
 博物館版 日本商品學
 木村惠吉郎氏 大學商品ノート
 專門部應用化學ノート
 奈佐忠行氏 專門部商品ノート
 東京商科大学著 日本商業教育五十年史

(一橋大學教授)